

〈エッセイ〉

「日本研究教育年報」終刊号に寄せて

蕭 幸君

（東海大学 日本語文化学系）

Little Things Big Memories

Hsingchun, HSIAO

(Tunghai University, The Department of Japanese Language and Culture)

原稿受理日（2020-02-14）

日本研究教育年報. 2020, Vol. 24, pp. 133-138. ISSN 2433-8923

2019年、外語大の国際日本研究センター夏季セミナーの開催中に、「日本研究教育年報」が終刊号を迎えると知らされ、年報や日本課程について書くよう、原稿依頼の話をいただいた。新しい学部が立ち上げられることにより、さらなる一步に向けて邁進するための終刊号であると即座に理解し、日本課程の一在籍者だった者として、そしてこれまで何度も年報と関わってきた者として、執筆の機会をいただいたことに、恐縮ながらも心のなかで感謝の念が湧き上がった。

思えば、年報とは、実に長期にわたりさまざまな形で関わってきように思う。学部生の頃はほとんど一読者にすぎなかったが、博士課程前期に進学することが決まり、勧められるまま初めての投稿をし、またごく短期間ではあったが、業務面で協力したこともあった。その後、博士課程後期を経て、外語大の大学院国際文化講座の助手を勤めるようになってからは、院生向けの紀要や教師を対象とした機関誌に原稿を書くようになった。年報にふたたび原稿を寄せる機会を得るのには、台湾の東海大学で教職に就くまで待たなければならなかった。その時の年報はすでに、「日本語学科年報」から「日本研究教育年報」へと名称を新たにしていた。

振り返ってみると、年報に投稿する最初のきっかけは、古典の手ほどきをしてくださった村尾誠一先生からのお声がけだった。卒業論文の谷崎についての論考を短くして投稿するよう、勧めてくださったことが、すべての始まりである。まだ当初は、「日本研究教育年報」と改められる前だった「日本語学科年報」に、こうして私にとって初めての投稿論文、「扉の彼方―谷崎潤一郎『鍵』試論―」が掲載された。これは私の卒業論文である「仮面の陥穽―谷崎文学試論」の一部を、『鍵』と小田原事件との関係性に焦点を絞って、まとめたものである。その論文を掲載した年報を手にして読み返してみると、編集後記にこのような言葉が記されている。

『年報』が、現在の 卒業生・在学生の論文を柱とする形で 編集されるようになって、はや5年がすぎ、今回で6号目となった。「石の上にも三年」のつもりで ふためぐりしたことになるが、そろそろ『年報』の存在理由が きびしく問われる ころだろう。

今回は、学科の先達 阪田雪子先生と窪田富男先生の記念論文集 編纂の事業と重なったせいもあるかもしれない。あるいは、それに限らず 情報化社会とやらで出版文化も華やかで、発表の場所に困るというようなことも もう ないかもしれない。「自由に」書ける場所が少なくないのだろう。『年報』のありかたが、しきりに気になる一年であった。

今号の各論文は、編集委員会のうるさい注文に、とにかくにも たえて、芽を出し 陽の目を見た論文である。力強く育ってほしいと願っている。

(六年寝太郎)

いま読んでも、当時、編集委員の先生方がどのような思いでこの年報を手がけてこられたか、その考えが強く伝わってくる。研究や教育に日々追われている先生方が時間を惜しまず、年報のあり方について常に気かけながらも、この年報を通して学生たちにできる限りのサポートをし、そして研究の人材を育てようとしている、その気持ちがひしひしと伝わってくる。その号に掲載された論文の執筆者をみると、日本の学生と留学生が二名ずつと半々で構成されており、偶然とは言え、あたかも当時私が在籍していた日本課程の縮図のように映る。

うまく表現するのが難しいが、多文化協働学習とでも言うような、それに似たような環境に私は身を置いて学習してきたような気がする。外語大の日本課程は、人数の割合こそ異なるものの、日本の学生と留学生が同じ学習の場で、それぞれ目指す目標に向けて勉強を共にしてきた環境が、大きな特色をなしているように思われる。そのためか、日本語教育を志そうとしている学生が多く、また常に多文化を背景とした日本語学習を日常的に意識的に捉えることができ、自らの日本語状況を確認し、見直すことができるようになっている。これは日本の学生に限らず、留学生もこうした学習環境によって多く学んでいる。さらに欲張って言うならば、外語大のような、日本語の他にも数多くの言語を専攻として設けているなかで、それと並行した形で日本課程があるという環境では、他の大学に比して、なかなか体験できそうにない学習経験が得られる。キャンパスのなかに常に数々の異なる言語が飛び交い、さまざまな文化状況が溢れ、そのなかで日本研究をするという、振り返ってみると、このような環境がどれほど大事で、またなんとも贅沢なことかと、教師となつたいま、切実に思う。

それが例えば年に一度の文化祭で、学生同士で力を合わせて一つのイベントをやり遂げていくことや、ちょっとした見学旅行で行動を共にする教師と学生とのインタラクション、否、もっと日常的に最も利用頻度の高い共同研究室に、毎日日本の学生と留学生とが行き交う場に、どのような些細なやり取りでも、絶えずコミュニケーションが必要とされ、そのなかでお互いがお互いの背負わされた文化的状況の違いで、軋みあったりまた歩み寄ったりすることの繰り返し。これらがまさしく生きた学習の場と化していくということ、そして、それが外語大の日本課程のカリキュラム・デザインの段階で想定されたであろうことを思うと、不思議な心地すらしてくる。

考えてみれば、なぜ私が台湾の東海大学で教えることになったか、それも外語大の日本課程での学習経験と深く関わっている気がする。時間を遡って、外語大の大学院国際文化講座の助手を経て、一年間コーネル大学に行っている間のことだが、台湾東海大学の求人情報がある台湾研究者の知人を伝手に送られてきた。その東海大学の学科ホームページを閲覧し、応募を決意させてくれたのは、紛れもなくそこに掲げられた「多元文化交流」という理念だった。その理念に共鳴できたのは、何よりも外語大に在籍していた時に、自分自身が学習者として感じていたジレンマや、研究の道に進もうとしてから考えるようになった、自分にとっての「日本研究」のあるべき形と合致した点がいくつもあったからである。

それは例えば、日本の大学でなぜ私は日本近代文学を専攻したいと思ったか。日本の大学で日本近代文学を専攻するとは何を意味するのか。逆に、台湾に戻り、そこで私が日本の近代文学について教える意味はなんなのか。台湾の学生が台湾の大学で日本研究をするとは何か、などなど。これらはすべて、外語大の日本課程での学習経験抜きでは語ることができない。また、年報への投稿から始まった研究意識の芽生え、大学院に進んで、学位取得後に大学院の国際文化講座で助手を務めたことと、切っても切れない関係があるといまでも思う。

実際、台湾の東海大学で行われたカリキュラム改革の多くの場において重要視されたこととして、人と人との関係性（例えば、異なる文化背景の人々がお互いに関わっていた時に、どのような姿勢で臨むべきかなど）、本から知識を吸収するだけでなく、キャンパスを出て外の人々と接触し、「出来事」の現場を自分の目で確かめる行動力、研究する際の、領域横断の必要性などがその一部の例である。東海大学が行なっているこれらの実践に、外語大での学習経験が響き合ってくれた。その後、教育に携わる者としてまた年報と関われるようになったのも、こうした経緯があったからだろうか。東海での持ち授業である文学史を「多元文化交流」の教育趣旨のもとでどのような形で行なっていくかについて考えを巡らせた時、台湾の高等教育機関で学ぶ学生に向けて、「日本近代文学史」はどうあるべきか、という問いが常に思考の核心になっていた。これはある意味で、かつて外語大で学んでいた私自身の疑問に対して、今度は教師という立場で私なりにひとつの答えを出そうとする試みであったが、2009年にその考察をまとめたものが「日本研究教育年報 No.13」に掲載された。この考察が年報という発表の場を得たことは、私個人にとっては重要な意味を持っていた。

ここからは学習と研究の話題から少し離れて、「日本語学科年報」の話に立ち返りたい。なぜかという、この「日本語学科年報」は私にとって、最も馴染み深い年報であ

り、多くの思い出深いものが詰まっているからである。そこには私がいつも楽しみにしているコーナーがあり、それについてぜひ触れておきたい。「日本研究教育年報」に改題される前の「日本語学科年報」には、〈論文〉〈研究ノート〉の他に、〈彙報〉、「エッセイ」「お元気ですか」、そして投稿要領・編集後記などといった分類が設けられている。

このなかで「エッセイ」というコーナーは、日本課程に在籍している学生たちが自由に書いたものを載せている。学生の頃は、これらのエッセイを読んでは、人の感想や楽しい体験に共感し、今度は自分でもやってみようという気を起こさせてくれるものだったが、いまでは、教育に携わる者としての立場で読みなおしてみると、学生の関心のよりどころが改めて見えてくることで、別の意味でとても興味深いコーナーになっている。どのエッセイも生き生きとして、学生たちが日本で新しい物事との出会いに驚き、感動している姿が目につくほどである。

また、〈彙報〉というコーナーでは、その年度に書かれた修士論文や卒業論文の題目一覧が載せられており、かつてはただ記録として眺めていたものが、なぜかいまでは、論文の題目からそれぞれの年に、学生たちがどのようなことに関心を持って取り組んできたかを、総覧できることのありがたみを感じる。かつてはただテーマの羅列としか受け取れなかったものが、一つ一つ、重みのあるものとして思いを巡らせてくれる。

そして、私の最も気に入っているコーナー「お元気ですか」は、卒業生の皆さんが年報を受け取り、年報へのフィードバックを含め、自分の近況報告を寄せあうのが主な内容となっているが、そこには実に様々な心の動きや人間模様が詰まっている。手元にある「日本語学科年報 16」に掲載された近況報告を見ると、日本、韓国、中国、台湾、ポーランド、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、香港、シンガポール、アメリカ、タイ、フランス、インドネシア、ヴェトナムなど、実にたくさんのところから便りが寄せられている。この一冊だけでもこれほど多くの場所から卒業生たちの声が集まり、そこから自分の知っていそうな人たちの名前を探しては、少しでもその人の近況がわかることで嬉しくなったり、また、まったく知らない人たちのメッセージを読んで、それだけで距離が縮んだように感じたりもする。一見、ただのメッセージの寄せ合いにみられがちなコーナーだが、このように、とても不思議な気持ちにさせてくれる魔法のようなコーナーである。私からみれば、「お元気ですか」というコーナーは、年報のなかでも唯一インタラクシヨンのできる場であり、卒業生たちの生の声で、彼ら／彼女らの「いま」を知るととても貴重な、そして大切な場であったように思えてならない。

ここまで読んでこられた方は、きっと気づいてくださっていることと思うが、ここで私がもっぱら想念を巡らせているのは、ひと昔前の古い姿をした年報である。もちろん

今回、原稿を寄せたのは「日本研究教育年報」の終刊号であるが、その前身である「日本語学科年報」はどのような内容だったか、きっと知りたいと思う人もいないだろうか。改題前の年報と触れ合う機会があった私であれば、終刊号を手にとってくれる方々にお伝えできるかもしれない。そう思うと、少しでも多く、改題される前の「日本語学科年報」について触れておこうという思いに至ったのである。

実際、教育に携わるようになってからも、何度か「日本研究教育年報」に原稿を寄せることがあったが、「日本語学科年報」と比べて、それらはいずれも比較的に新しく、またその多くは電子版が発行されており、きっとたくさんの執筆者が言及しているであろうと勝手に推測しながら、小稿の内容を限定的なものにさせていただいた。

今回の執筆を機に、「日本語学科年報 16」を読み返したときに、実はもう一つ思いもよらない「発見」があった。それは〈彙報〉に載せられた数々の活動写真に、懐かしい元学長の原卓也先生や、恩師である国松昭先生の姿があった。また留学生係で、ずいぶんと、留学生である私たちの味方をしてくださった井上さんの写真もあった。進学などで他大に行った外語大生が口を揃えて言っているのは、外語大の留学生係は最高に親切だということだったと、写真に写っている井上さんの姿を見ながら懐かしく思い出す。

このように、私にとっての年報とは、日本課程の歩み、試行錯誤や、改革の痕跡が歴然と残されており、教育者の思いのいっぱい詰まったものである。それとともに、年報は研究の扉を開いてくれるものであり、研究・教育のあり方を考えさせてくれるものであり、また、遠く離れた人々と触れ合う機会を与えてくれる存在でもあると、あらためて実感しつつ、筆を擱く。